
真剣恋姫

ちい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣恋姫

【Nコード】

N6216Y

【作者名】

ちい

【あらすじ】

魏ルートを終えた

北郷一刀が出てくる。

恋姫無双と真剣で私に恋しなさい！でのクロスモノです。

最初のうちは鬱注意。

終焉（前書き）

はじめましてちいというものです。

これからアニメで外史扱いの北郷一刀に
まじこいの世界にいらしてもらう物語書こうと思います。

文章能力が少ないので原作で補強してもらったほうが読みやすいと思います。

誤字脱字は気にしてるんですが、勢いで書くので後々直します
それからでる物語としての相互。

性格変換ご都合主義で書いていくと思うのでそれが許せる人は
これから宜しくお願いします。

終焉

これは絶望から始まる外史

胡蝶の夢

ある男の見た蝶になる夢。

蝶として一生を終えた男は人間に戻った時
ふと自分は蝶の見ている夢なのでないかと
考えてしまう。

男は蝶の夢であり、蝶は男の夢かもしれない。

誰もわからない本当と嘘の立証

後姿の彼女が本当に小さいと思ったのは初めてのことでないだろうか。

星が輝き月が浮かぶ。

小川の闇を際立たせるきらめき。

それを最後まで見続けながら。

俺は最愛の女性に喋りかける。

さようなら、華琳愛してたよ・・・

その言葉は彼女に届いていたのだろうか、

三国志の夢から振れた世界に夢は覚める。

意識が薄れ、俺は暗闇の中にいた、

夢が覚めれば十数年続いた日常に戻るのかと思っていれば、
懐かしい母親と父親声は聞こえず

ただ誰かが泣く声しか聞こえてこなかった。

いや、違うこれは嬉しさが溢れ。

世界に感謝している二人の言葉で表せない感情の吐露。

生命への歓喜。

確かに両親はそこにいたのだ。

俺が理解するには、多くの時間が懸かった
北郷一刀の二度目の生の始まり。
自分がまた二人の子供として生まれた矛盾。

始めのうちは三国志の世界で家族の思いを無視し
一日一日を過ごすのに手一杯だった自分への嫌悪感。
振り切ったと思っていた感情は二人がどれだけ俺のことを考えてく
れていたのかと
気づかせる後悔と幸福感だった。

しかし、気づくべき点はそこだけではない。

感情とは不思議なもので楽しいことを考えていれば幸福に包まれそ
れを容易く受け入れ
不幸と考えれば嘆き拒絶し、考えてしまう。

俺は誰なのだろうと、
大局に背き歴史を歪めた俺は華琳達の世界から消えていった。
その薄れていく自分の姿を思い出し気づくべき答え。
夢として覚めたのではなく。

俺は・・・死んだのではないか？、
本来の流れを歪めて、他の誰かになったのではないかと。

その考えに至った時、俺は今まで感じていた家族の存在がまるで張りぼてのように皮と骨で固めた人形に思ってしまった。

理解した瞬間

俺は意味もなく泣き叫んだ。徐々に大きく！大きく！！大きく！！

赤ん坊の身体で、壊れたような咆哮。

生まれたての子供が出してはいけないうな狂った笑い。

永い永い暗闇の中

1日の感覚などすでに消えていた。

総てがどうしようもなくなり、俺が唯一のよりどころにしたのは、

共に戦い、笑い、泣き、傍にいた彼女達。

意味がないことはわかっている。

しかし、代わる代わる名前を呼んで意味もなくなのたうち回った後
俺は・・・

絶望の中ぷつんと意識を手放し。

暗い暗い闇に落ちていった。

あるべき場所が崩れ、

闇に放り堕される虚無感に苛まれ。

北郷一刀は生を放棄したのだ。

世界を鈍く照らす光。

いつから傍にいたのだろうか？

自暴自棄に成ったいた自分のそばに白い球体が在ったのは。

総てのことが嫌になり、生きることを放棄した自分の
周りを彷徨うことなく見ているこの物体は。

払いのける動作も出来ない意思気の中で、

よく分からない人の温かさを感じたのは

何日も何日も傍にいて見守るかのようだった存在は
何も語らず唯あった。

最初は独り言だった。

ぼそりぼそりと音が漏れる。

後に怒りの掃き溜めとなっていたそれに

壊れた音で喚き

無くしていた心が呼び起こされてしまう。

何も無かったのならこのまま命を落としたのだろう。

心は感情に左右される。

それが唯の八つ当たりでも。

感情の隆起は心の力。生への渴望。

意地汚く求めてしまった生。

思考は廻り

感情はそれを焚きつける。

思考の海の中で考えてしまう
何気ない問いへの答え

なぜこうなったのか

なぜ偽者の俺が、両親の愛情を受ける身体に入っているのか
それぞれが黒い思いをかき混ぜる。

そして、なぜ俺は死にたいのだろうという疑問
それは・・・

なんだ
・
・
・

なんだ！　なんだ！！　なんだ！！！！！！！！！！

また暴れだそうとした矢先、それはふつと出てくる

ああ簡単だ、簡単なんだ。

かつてに偽者にした両親の小さな違い。それは切っ掛けでしかない。

切り捨てた家族の思い。

振り切った後ろめたさを正当化する自分自身

そして、

それを掻き消すため愛している彼女達を利用した。

自分への本気の殺意だった。

白い球体はまだ眼の前を陣取っている。

話をしましょう

外史という、青年の物語を・・・

終焉（後書き）

長い文章が書けない・・・

始まり

白い球体が語ったのは変哲も無い
誰かの物語。

とある青年は古い鏡を壊し膨大な意思の流れに飲み込まれる。
それは抗いようも無い大きな力。

しかし彼は多くの仲間と共に血と汗とその他諸々を出しながら
最後まで抗い続けることで。

本史を本流とする小さな外史に対し。
力を示した。

剪定者を退け。
強大な敵に勝利し。

三国を制覇した。

でもそれでハッピーエンドになるとは限らないわ。

だってそうでしょ？

終端とは物語が共有する必然。

喩えどんな結果だろうと

かならず訪れる終わりなのだから。

そして、外史はまた開いた。

これが発端。

あなたの身に起きた出来事の原因、原因、因果。

そして結果。

これで粗方話したかしら？

ここまでの話を聞いて貴方はどう感じたの？

理不尽な運命にふざけるなと思った？

突然な幸福に喜んだ？

それとも、ただただ悲しんだ？

いえ、違う答えを出したのかもしれないわね。

とにかく貴方はどう考えたの？

「・・・俺は」

まあ、その答えがやり直しだったとしても、私は何も出来ないのだ

けどね。

聞かせて頂戴。

素直な貴方の言葉で。

白い球体がまるで赤子をあやすように語り掛ける。

なんなんだよ。

脈絡もない話、意味の判らない突然の答え。

そして、問い。

白い球体は

急に喋りだしたと思ったら息もつかずに話し続け。

俺の頭は多くの情報を理解できずパンクしかける。

しかも、俺からの問いには総て答えたと言わんばかりに、

話の最後の答えを聞くために俺の周りを、すごい速さでぎゅいんぎ

ゅいん周り

急かし続けていた。

他にも色々聞きたいことはあるが、

うざったいので、早く答えようと思考を深くしたが、

なんてことはない。

俺の思いは簡単に零れ落ちていく。

認めたくないが、このめんどくさい球体には救われたのだから
絶望の淵から飛び出し、

目指すべき道を思い出させてくれた札として
このくらいの答えはだそう。

俺の気持ち。

そう、ハッキリ言って関係ない。

聞かされた本史と外史。

北郷一刀の始まり。

俺の今の状態も総てひっくりかえして、
俺は俺だ。

責任も総て背おう

それが俺がしなければならないことならば。

理不尽さに絶望もした、死にたくなった、自身を殺したくなる後悔
も確かにあった。

許されることの無い十字架を背負い、償うこともできず。

もう俺に彼女達を愛する資格は無いのかもしれない。

それを思うとまた落ち込むが。

それでも

みんなには笑っていて欲しい。

彼女達の思いを

自分の思いを終わりにしないためにも、

俺は・・・

たとえ、どんな結果になろうと

あの寂しがり屋な女の子にまた笑顔で会いたいのだから。

やり直しは出来ないと言っただけどね。
でも、それでこそ貴方よ

それが想いを受けるに相応しい本来の自分。
彼女達の愛した北郷一刀。

傲慢で自分勝手に無鉄砲。

そう思う人たちにはそう言わせておきなさい。

私は貴方を認めるわ、

それがけして褒められる決断じゃなくてもね。

「お前に認められてもしようがないんだけどな」
そんな軽口を叩きながら、周りを見合せば。

いつもの暗い闇はいつもより明るく見えていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・なんか、ムラムラしてきちゃったわ」

「・・・・へ？」

突然何も無いこの空間に変な空気が流れた。

俺はさっきの言葉の意味が理解できなかったが、身体は自然と後退していた。

なぜだろう？身体が意味も無く震えてきやがった。

「ご主人様をず〜〜〜〜〜〜と見ていても飽きはしないけど」

「は？え？」

そう考えてみれば、白い玉の声は口調は女だが質は男の低音ボイス姿を見ずともおっさんだろうとわかる。

「やっぱり、やっぱり肌と肌との感触が恋しいわん♪」

白い球体は桃色の煙が溢れ出したと思えば、輪郭を作り出していく。それが、本格的な形になったとき。

「#%&‘F G H! %&a m p; , (, % ,) ○ ○」

「さあ、受け止めてご主人さま~~~~~~~~ぶっちゅ~~~~~
~~~~~!!!!!!」

「ぎゃあああああ!!!!!!!!!!!!」

少しずつ現れた、お下げのスキンヘッド筋骨隆々なピンクビキニその姿が  
段々と現れジリジリと歩み寄ってくるその姿に

俺は右ストレートをぶち込んだ。

そして、  
月日は流れる。

何もない荒野、それが果てなく続いている。

そこに漂うのは

鉄の匂いと埃の味

怒声が響く荒野に学生服を着た生徒が自分の獲物を振り回しながら  
火花を散らし。

敗者を踏みにじり、勝利に酔っている。

人と人がぶつかり合い、意思と意思が交差する戦場を見下ろす。  
崖の上で

それを一人と一匹が眺めていた。



その先には  
茶色っぽい黒髪の青年が、木刀を振り下ろし敵を切り捨てながら。  
敵陣を駆け抜る。

しかし、包囲は厚く敵は盛大。  
一人また一人と数は減る

最後の一人になった、青年は疲労困憊  
もう虫の息ではあったが。  
だがその瞳に諦めの色はない。

完全に取り囲まれながら威風堂々と眼前の敵に言い放つ。

「そちらの最強の将に決闘を申し込む！」

その青年が一国の将に見えたのは勘違いなのだろうか。



## 始まり（後書き）

違和感をなくす薬って売ってますか？

## 始業式（前書き）

どこにいく北郷一刀

## 始業式

夢を見ていた

夢の中で俺は数多くの人たちと笑い合い、  
悲しみを共に乗り越えていく。

そんな夢を。

夢に出てくるのは決まって女の子なので、  
実は欲求不満なんじゃないかと

悪友に囃されたりもしたが  
それでも。

その夢から伝わる。

土と草の匂い、鉄と血の輝き、生と死を交差させる怒声。  
それは酷く他人事のように感じたが、  
どこか懐かしく夢だとはとても思えなかった。

何度ただの夢だと振り切ろうと忘れられない。  
雄大な小さい背が離れない限り。

夢の覚め、再び現実へ。

身体に汗が張り付き少し気持ち悪い朝。

「また、この夢か」

俺は、日の光をいっぱい吸った布団の匂いに包まれながら目を覚ます。

「近頃見ないと思っていたら、久しぶりだな」

顎に手を当て懐かしむのは  
なんてことの無い日常、  
それを彩る一部分だと思うほど見ていた夢。

何時から見ていたかも判らない誰かを好きになった夢。

寝起きのまどろみに身を預けていると。

「一刀！そろそろ起きろ」

久しぶりに聞いたじいちゃんの大声が響いてきた。

「ああ、今起きるよ」

布団を端に寄せ、まだ寒い空気に触れながら下に。

俺が居間に上がると、味噌汁と漬物それと焼き魚といった。  
今どき珍し朝食が用意されていた。

「おう、やっと起きたか？新学期そうそう遅刻でもする気なのか？」

声がデカイ以外優しそうなじいちゃんは自分もばあちゃんに起こされてるのに  
暢気に笑っている。

その笑顔に

「さすがにそんな度胸はないよ」と  
気軽に答え。

テーブルの下座に座り込み  
朝からガツガツと朝食を胃の中に収めていく。

食を進めていく中で

視線を感じて見上げてみれば  
二人ともすでに食べ終わっているらしく、微笑みながら俺の顔を見ていて  
むず痒いのを我慢しながら食を早める。

食事が終わり。

部屋に上がり新しい制服に袖をとうしながら

パン！！！！

強く叩きすぎかもしれないが、顔を叩き気合を入れる。

さあ、これから新しい学生生活の始まりだ。

玄関を開け、じいちゃんたちに挨拶を交わして。  
庭先の犬に話しかける。

「じゃあ、行って来るな赤兎」

キャン！！！！

元気いっぱいこの犬は日本式の家には似つかわしくないコーギー  
犬だが

そんな事はしるかと思邪気に今日も鳴いている。

北郷一刀の新しい日常。

それは晴天の下、輝かしく始まろうとしていた。

ぎゃああああ“ あああー！！！！！！

・・・まあ、そんな事はなかったが。

古いタイプの不良から、

鶏が三回転宙返りを失敗して首から逝ったような音が  
そこら彼処に響きまくっている。



そして自分の目の前に、高々と積み上げられた不良たちが  
黒髪の綺麗な女生徒に  
ぷよぷよの如く少しずつ消しされていく。

いつもは穏やかに老人が日向ぼっこしたり、子供が犬と戯れている  
はずの

川原が何とも言えない空間になっている。

ごく普通の日常を過ごしていた北郷一刀は。

「及川のやつ久しぶりに会うけど元気かな」  
考えるのを止めた。

時間は過ぎ。

〈教室内〉

「よっ！ かずぴー元気やったか？」

声を掛けられ振り返ると。

懐かしい顔が見える

少し軽い感じのこの男は及川佑。

小さいころから腐れ縁で久しぶり会ったにしては、変更点は眼鏡位  
なので  
すぐに分かった。

「おう！ お前も久しぶりだな、会ったのって去年の夏だけ？」

「あゝ覚えてないな、まあいいやないか、泣いても嘆いてもこれ

から三年間一緒なんやし」

「・・・そういえば俺お前に三千円かしたような・・・」  
二年の夏休みに会ってカラオケやゲーセンに行って遊び回ったんだが、

調子に乗りすぎた及川が電車賃がなくなり泣きついたので、  
少し多めに貸してやったんだが、この野郎と呆ける気らしい。

「さっ！ かずぴー始業式行ぞ〜」

完璧に誤魔化す気の及川に苦笑いすると、少し遅れて付いていく。  
本来は怒るところなのだが今回はやめておこう。

後で取り返すけどな。

ざわざわざわざわ

体育館に新入生が。溢れかえる

式特有な雰囲気は、学生の心を騒がせ。

それは全国共有なのか多くの教師が怒ろうと止まらない。

「今年の生徒も元気が良い」隣の教師にしゃべりかけ壇上に上がる。

川神学園 学園長は立派な白い髭を触りながら豪快に微笑んでいる。

「ほほほ。元気がいいのう」

川神鉄心。悪童を見守るその姿は優しいおじいちゃんに見える。

「と、いうとでも思っているのか！！！！！！この馬鹿者が！！！！！！！！！！」

まあ、気のせいだけど。

ビック！！！！

全員が身体を引付けを起こし、体育館を大きく振るわせる。

一喝。

蜂の巣を突いたような騒ぎは一瞬で静寂に変わる。

何人かは、その中でも余裕しゃくしゃくのようなのだが、それでも、

「まあ、この位にしておくかのう」

今まで騒ぎ続けた者たちが、壇上の老人に集中していた。

「ワシからの言葉はこれだけじゃ。善く学び！良く食べ！好く動くことじゃ！多くは語らん！！

学園生活とは長いようで短い、後悔などといった泣き言はワシは聞かぬからな」

壇上を下りるその姿は堂に入っており空気を完全に支配していた。

「では、始業式をこれで終了する、それぞれ決められたクラスに行き先生方に

従って、説明を受けてもらう。解散!!」

教師の声はよく響き全員に聞こえているはずなのだが、動き出すに少しの時間が掛かった。

教室内には疲労感が蔓延している。

一年B組

そこには無事、一緒になった二人が机合わせで座っている。

「いやゝ噂には聞いてたけど、ほんとにすごい人やったなゝ」  
及川が突っ伏した状態でさっきの出来事を話してくるが。

「あれを、すごいで済ますなよ」

俺は元氣なくあの覇氣ともいえる、凄みをすごいで表す及川に文句を言った。

「ほかになんて言えと？」

「・・・すごいなゝ」

お互い苦笑いしかできず、  
変な空気に包まれながらHRが終わる。

帰り際。

及川が用事で急いで行くのを見送ると鞆を持ち  
北郷一刀は帰宅する。

### 【川原での風景】

少し離れた場所。

男女七人の集団が下校をしてる。

「おい大和、今年の新入生で息の良い奴はいるか？」

そう話しかけてくるのは川神百代。

武道四天王の中でも最強と名高い女性は。

綺麗な黒髪無造作に風に棚引かせながら、弟分の直江大和に  
今年の兵を聞いてくるのだが。

「そんな急に情報は入らないよ姉さん」

と返されている。

学生の会話としては違和感が多いが成立してる分  
たちが悪い。

「じゃあワン子！京はどうだ！？」

ポニテの子とショートカットの女の子たちに振ってみるが  
答えは変わらない。

「んゝそうか」

残念そうに腕を組むと

「つうかモモ先輩、俺たちには聞かないのかよ」

「ガクトとモロに聴いてしょうがないだろ？」

お前たちに聞くなり可愛い子猫ちゃんの情報だ」

「あ、納得」

「てめゝ大和！どういう意味だ！」

「しょうがないだろ、お前クラスでもモロと一緒に騒いでたし」

「キャップも何か情報ある？」

「俺か？んゝゝないな！！」

和気藹々と騒ぐ集団が  
橋を超え同じ寮。

島津寮に帰ろうとしていると

前方に黄色い声を上げている人だまりが見えた。

「ん？なんだ」

七人が目を向けると。

朝、ぷよぷよが行われていた、川原で下校中の女の子達が集まり。  
膝を下げ、きゃいきゃいと騒いでいる。

その足元には一匹の犬が尻尾を振っていた。

その姿に騒ぎ、撫で回し、喜んでいる。

「おお？如何した？子猫ちゃんそんなに騒いで？」

「百代先輩！！嬉しい！！こんなところで会えるなんて」

一人の女学生が大きな声を上げると何人かの学生も一緒に騒ぎ出す。

その姿を少し遠くで眺めている大和たちは

いつの間にか一年生にも騒がれている、百代の手の早さに驚いていると。

「お、なんだこのワンコロ」

視線を下げ、少し不満そうなコーギー犬に話題を移すと。

一年生は可愛いでしょうと持ち上げる。

「ほくなんだ？早くもコイツに浮気か？ 関心せんぞ」

「違いますよ、この子は今ここで見つけたんです」

すぐに犬を下ろし、今まで騒いでいた女学生は  
川神百代に群がっていく。

大和たちはその犬がさっきまでちやほやされていたのに  
無視されている状態に、少し可哀想に思っていると。

犬はスクツと立ち上がり。

歩いていく。

帰るのかと思えば、犬はそこで座り込む。

きゅくゅん

腹を見せ、目を潤ませ、撫でろと寂しそうに鳴く。

そのあまりの可愛さに女学生は夢遊病のようにフラフラと  
百代の傍から離れていく。

ポツン・・・

顔を引きたらせる百代に



「まあ、動物は女の子皆好きだからね  
気にしないほうがいいよ姉さん・・・」

大和たちが一斉に慰めると

「気になぞなら・・・む!!」

拗ね掛けている百代が鬱陶しそうに皆を見ようとする  
目の端に女の子達の隙間に見えるコーギー犬の顔  
それに意味のないドヤ顔が見えて。

「くそ!!!!!!!!!!」

と叫んだ。

「赤兎？」

キヤイキヤイと騒ぎ、一人が叫ぶ。  
そんな異空間に響く男の声

その呼びかけに、犬が駆け寄ってくるのでその青年に視線が集まる。

キャンキャンと騒ぎ回る赤兎と呼ばれた犬。  
それを撫でながら。

視線を集めているのに耐えられなかったのか、

「ど、どうも・・・」

と北郷一刀が声を漏らした。

女学生がまた群り、赤兎の名前を確認するために  
一刀を質問攻めにすると。

用は済んだと投げやりに話を切る。

それに苦笑をしていると。

「お前があのだの飼い主か？」

女の子が見せるとは思わなかった凄みを出し  
喋りかけてきた。

「おい！あのだが私の子猫ちゃんを奪っていったんだぞ  
飼い主なら何とかしろ」

「そんなこと言われても」

カツアゲです完全に。

獅子に迫られる子犬のような一刀に大和たちが  
簡単に手助けしようと寄ってきて。

百代を宥めていく。

とりあえず赤兎が女の子好きなのが悪いと力説し何とか一刀に  
来る勢いを削ぎ。

同じ新人生らしい大和たちと親交を深める。

その後、赤兎が来てまた騒ぎ出したが。

大和たちと別れ、

北郷一刀の騒がしい学生生活は一日を終えた。

時間は進み。

深夜遅く、すでに店の電気は消え独特な空気を孕む、  
春の陽気を遮る寒さの中、一つの影が駆け抜ける。

繁華街を抜け、住宅街近くの空き地。

そこに、小さい小型犬が駆け抜けてきた。

キャンキャン！

鳴き声は身体に似合わず大きい。

吠え続け、野良や家犬も呼応するように、伝わり広がり続ける。  
近所迷惑である。

くうーん

少し困ったその表情は人間味があり  
違和感がでてくる。

「もうーダメじゃないご主人様ー久しぶりだからってあんなに私の名前を呼んで」

屋根伝いから飛び降りてくる巨漢。  
それに怖がりもしない小型犬は。  
ハッキリと言葉を出した。

「変な声出すなよ貂蟬」

「まあいーわん再会を祝してお酒でも飲みましょうか」

「犬に酒進めるなよ場所移すのは賛成だけだな」

やれやれといった雰囲気犬。

「じゃあ、決まりね」

「ああ行くぞ」

蝶蟬と呼ばれた男の格好は表現したくないような格好なので  
割愛するが。

一人と一匹は街の暗闇に紛れていった。

## 始業式（後書き）

続きは来世くらい？

## 一人と二匹（前書き）

短い・・・

## 一人と二匹

抹消された者の決断

暗い闇

そこに浮かび上がる、手を赤く染め上げ荒々しく息を整えている青年は

血の海に沈んでいる物体を見下ろしながら叫ぶ。

「っってお前服屋の店員！？なんでアンタがこの世界にいるんだよ！」

その巨漢の男は洛陽の町で服や装飾を売っている店で働いており。物の趣味は良いし数も多く本来なら人気店になるはずのその店の名前は

『漢女堂く洛陽支部』

スキンヘッドのおさげ髪、筋骨隆々な身体に股間にピンクの布一枚。もうここまで逝くと笑うことしか出来ないこの生物は。

華琳が怯えるのでまったく話題には上がらないが肝っ玉の太いおばさま達に人気な異界の店主ある。

「あら？覚えていてくれたのご主人様」

いつの間にか復活している巨漢が心底うれしそうに喜ぶ。



「いやお前を忘れようなんて出来るの、いる訳ないだろ・・・」

「うんもう！嬉しいわん♪やっぱり私とご主人様は運命の赤い糸で結ばれてるのねん」

「・・・もうそれでいいから、そのご主人さまって言うの止めてくれ」

いやほんと。さっきの打撃戦もあって精神が磨り減ってるんで。

「それはそうとご主人様、剪定者としてではなくただの貂蟬として私は貴方の選択に従わせて貰うわ」

よく判らない

皆と一緒にいた時にこの生物兵器の異常性は知っていたが。

性癖と見た目と性格と情け用の無いテンションを我慢すれば。

ホモで筋肉隆々でパンツ一丁のおっさんの気の良い奴。

それくらいの認識しかなかったからか。

目の前の男から感じる違和感はさらに加速していった。

「そういえば、貴方とは剪定者としては話したことはなかったわね」  
「せていいしや？」

「そ。剪定者。

本史を本流とする外史、その外史が本史を弱らせないために作り出した。

数多くの意思の化身よ」

「?..?..」

「まあ、わからないわよね、でも外史の突端体験し終末知った彼方なら教えてもいいでしょう」

槇蟬

三国志時代の最も美しい美女の名を情け容赦なく名乗る漢女の本来の始まり。

大いなる本史。

それを突端とする外史の意思

本史

例えを挙げたとしても膨大な量に達する人々の歩み。

今まで受け継がれた過去からの遺志、

過去の偉人達が成しえた偉業。

それは様々な人々に受け継がれ

今の時代に残っている。

何者にも揺るがせられない世界の歴史。

外史

演劇、歌、踊り、物語、本、言葉。

それぞれの思いが形作る。

偶像。

それは千差万別。

まるで飴細工のように形を変えながら人々の中に染み込み。  
広がり続ける。

それが本来の流れを歪めるとしても。

そんなもので世界が作られるわけではない。

そう思うのは理解できるが。

貴方は考えたことはあるだろうか？

劉備、孫策、曹操。この三人が現れた時代にどれだけの命が死に生  
まれたのかを。

その子供たちがどれだけの血と汗と涙を流してきたのかを。

今の世界を作る礎たちの未来への贈り物がどれだけの心に残り、伝  
わったのかを。

貴方は知っているはず、彼方を取り巻く世界でどれだけの者たちが  
この物語を書いているのかを

あなたは知っているはず。生命の息吹を

元は作り物なのかを知らない、それでもあの世界は無限に近い思いで作られた外史、それを彼女達は生きていたのだと。

時間は過ぎる。

この無限にも感じる暗闇の中、

北郷一刀がどう考え、答えを出したのかは他者である我々では理解できない。

ただの自己満足か博愛主義に似た愚考か。

その言葉を発したとき。

貂蟬は悲しみに包まれた表情をしながら同意をする。

ゆっくりと近づき

手は北郷の首元に伸びていた。

【とある一室】

「はくく、ケップ」

酒を注がれたコップに前足を添えながらコーギー犬がビールを飲み干しげっぷをする。

「あら、ほらご主人様もう一杯」

なみなみと注がれた麦酒に尻尾を振りながら。  
きゃほーいとはしゃいでいるこの犬と漢女が前半で  
シリアスを演じていたとは思えないほど。

アパートの一室は笑いが満ちていた。

「で、どうなんだ？」

「へえ？なにがくくく♪」

ドアからは入らないだろう酒樽を直飲みしながら  
貂蟬は惚ける。

どん!!

いや、どちらかというトン!ちゃぶ台を鳴らし犬が怒鳴る。

「だ~か~ら~!人間の方の俺だよ!!」

「あ?ああ、元気にやっているわよ?」

「そうか・・・じゃいいな」

「いいんじゃない?」

けらけらと笑いあう一人と一匹。

宴会は

現在、午前二時。

何度目かの乾杯の音頭が響き酒宴は続く。

俺たちの夜はこれかだ!!!!!!!!!!!!!!



## 一人と二匹（後書き）

シリアス書きたいのか、コメディー書きたいのか？



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6216y/>

---

真剣恋姫

2011年12月2日15時56分発行